

イメージ面接にあらわれた二重人格的自己

——自己構造化の解明に向けて——

水島 恵一・草田 寿子

Double Personality Observed in Mental Imagery

——Toward a Study on Self Structurization ——

Keiichi Mizushima and Hisako Kusada

In psychotherapeutic imagery interview, the clients often produce more than two selves. Such plural selves are regarded as subsystems of total personality, and their characteristics and dynamic processes are largely corresponding to those of actual pathological double-personality.

In this paper, we have examined 9 cases of experimental or training imagery interview in which double selves were observed. Many phases of dynamics of separation (or differentiation) and integration as well as other characteristics were found. These are regarded as the products of the imagery situation which strengthens the so-called "primary process" of the depth and allows flexibility in the structurization. Also, it is regarded that not only the incongruent parts (especially caused by the repressed strong affects or negatively valued desires) are structurized as the subsystem (due to defense mechanisms), but also the complexity, variety or potentiality of human nature needs plural sub-systems in healthy personality.

序 説

自己の形態も、また知情意を伴ったその内容も、一定のシエマによって構造化されたものである。すでに我々は、常識的な意味での個人的自己が絶対的なものではなく、社会的・文化的条件によって（そしてそこに生きる姿勢によって）構造化されたものであり、条件が違えば、まったく違った自己や存在の感覚が生じることを多く見てきた（前巻論文、有斐閣「人間学」、社会思想社「自己探求の心理学」）。一方、病者における自己崩壊、その他薬物などで自我が弱められた状態におい

て、構造化以前のカオス的な状況が観察され、それが時には現実的構造化によって切り捨てられている人間性の深層ないし本質を示してくれることもみてきた。健常者における夢分析やイメージ面接においても、たとえば時間、空間という現実形式がこえられ、それ以前の原点を体験させてくれると同時に、（たとえば未開社会人にみられるような）異ったタイプの時間、空間体験を垣間見せてくれることがある。すなわち我々は、構造化以前の（構造化の度の弱い）世界の内容的元型を知るためにも、また我々の常識とは異った仕方でも構造化された世界や自己の形態を知るためにも、

夢やイメージに依存するところが大きい。特にイメージ面接では、カオス的狀態に自らを置くような場合と、異った構造化原理を垣間見るような場合の双方がかなり明確に観察される。

本論は、自己構造の研究（とくに常識的個人的自己以外の構造化の研究）の一環として、人格分離・多重人格化のメカニズムを中心に、自己のダイナミックスを、イメージ面接例を通じて明らかにしようとするものである。クライアント（以下CIと略す）は、いずれも健常者で教育分析ないし実験的自己分析の中で多重人格を示したもの、すなわちイメージ面接の中で同時に2人以上の人物が登場し、そのいずれもある程度「自分」として感じられたものである。

以下イメージ面接の内容の要約を記し、その解釈と人格分離の考察を行っていくが、わかり易くするためCI自身すなわち語り手をS、CIがidentityの最も高い登場人物だとみなした人物を第1人格S'、次に高いとみなしたものを第2人格S''とする。第3人格的なものが登場する例もあるが、複雑になるので主に第1、2人格のみを扱うことにする。

〔事例A〕 26才女。自己の内部矛盾がイメージの中での「2人以上の自己」としてあらわれたとみられる例である。主人公の自分(S') ははじめ砂に埋もれようとしていたがいつしか巨大なイモ虫の姿になってしまう。それを見ていた別の自分(あらたなS')はイモ虫(S'')に嫌悪感を抱き見捨てて歩きだすが、鬼が登場してその鬼に斬りつけられてしまう。やがて、鬼と格闘の後、水に流され小さくなって語り手(CI自身=S)の口から体内に流入しやがて体外に流出して泣き始める。ここでまたあらたな「見る自分」(S')が登場し、泣く自分(S'')に困り果てる。そして鬼とのやりとりを含めた葛藤ののち、最後にはS''の肩に手をかけて二人でその場を受容しているような感じになるのであった。

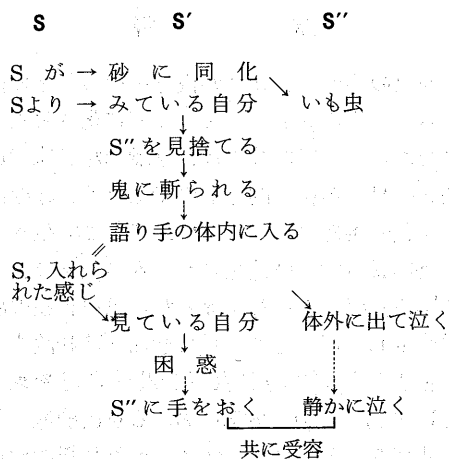
以上の第1回面接を(人格分離に関する解

釈に限定し)、もう少し詳しくみていきたい。(解釈はCI自身に受け入れられているものである。)

図1はその大要を表わす。はじめの単一の第1人格(S')が、不快なイモ虫のようになったときに、あらたな見ている自分(S→S')が登場してイモ虫はS''と化して消えてしまう。同様にして語り手の体内に入ったS'が流出し、泣きはじめると、また別の見ている自分が新しくS'として登場し、泣いている自分はS''となる。おそらくS'が、なまなましさを増すと、客観視する防衛が働き、客観視している方の自分が第1人格化してしまうという変換がおこっていたのであろう。ただ最後の方ではCIは泣かずにはいられない自分を認めて、それが何故なのかを本当に知りたがっていたらしい。おそらくそのあらわれとして以後は泣いている自分(S'')も消えることなく、みている自分(S')は、「どうして」と問い続け、2人格は親和・共存していったのだと解される。

以上に関連して、自己の感情に対する拒否感や理解できない困惑など重要なテーマがこの図に示されているのであるが紙数の関係で省略する。

以上、おそらくイドに近いような感情的内面S''と自我S'が分離しながら、どのように自我が内面を理解し、受け入れ、和睦していけるかという課題にCIは直面していたのであろう。



第2回目には初めから2つの人格の相互作用が展開された。自分(S')は何かの考えに没頭し、横では別の自分(S'')が泣いている。あまりに子供っぽく泣くので怒鳴りつけると、S''はブイとその場を去ってしまう。そしてS'が追いかけていくとS'に攻撃をしかけてくる。やがてS'は道なき崖を落ちるようになり、草原で動けなくなり自分の方が泣きだしてしまう。やがて崖の上のS''を見て、崖の上に戻りS''をつきおとしてしまう。S''は血を流しながら傷口をなめて崖下に横たわる。S'は勝ち誇ったように崖からおりてS''を背負う。しかしS'は最後にはまた鬼に追いかけてられてムチうたれ、水の中におしこめられてしまうのであった。

この回はS''も主人公的になり、つき落されて傷ついた場面など、むしろS''の方にCIのidentityが強く働いているとみられるようなところもある。またS'は前回と違ってかなり感情的存在になっている。はじめから泣いていたのは前回に引き続いてS''であるが、S'の方も怒鳴り、果ては崖下の草むらで泣きだしてしまう。おそらく自我と深層が混然としはじめ、自我自身が弱さや悲しみを自らに許さざるをえなくなってきたのであろう。このようにこの回では、感情防衛が崩れて、S''がS'化する傾向が生じている。最後に鬼にむち打たれるなど、弱さに泣かなければならない自分に戻ったのも、自己の感情的現実への直面に至ったのだと思われる。このような直面に至るまでに、弱さや感情をその都度分離してS''化していたのが第1回目だとすれば、第2回目は、かなり強くなってきた内的自己S'にふりまわされ、統合への第1歩をふみ出したものだと思う。

このケースでは、次の第3回目に単一人格の感情的危機を体験し(そのショックのためか)その後再び人格分離のテーマが続いてい

るが、複雑になりすぎるので省略する。第3回目までについて分離の法則を明確にするため、クライアント自身の評定、その他の操作的評定に基づいて、下位人格相互の関係、およびその分離・統合の過程を統計的に調べた結果は次のとおりである。*

- ① S'に対してS''以下の下位システムが分離しているときは、ほとんどの場合S'の方に自分だという実感がある。S'の定義上当然であるが、第2回目においてS''がS'を攻撃、ここで主体の実感は攻撃する側のS''にある、というような例外がある。
- ② イメージ内容からみると、直接の強い感情表現はS''側にみられる。しかしS''の感情が高まるとそのテーマは追えなくなりS'中心のテーマに移る場合が多い。逆にego-syntonicな感情は、S'側に多くみられる。
- ③ S'のイメージ内容における比較的強い感情表現は、いくつかみられるが、そのあとでS'の実感度が減少するが、あるいはあらたな見る自分S'が登場してもとのS'がS''化している。

以上を総合すると一般に感情が高まると、その主体を主人公にしておくことができず別の人格(感情の少ないS')を主体化して感情的な人格を分離してしまう。つまり、この記録からみる限りは主として感情防衛のために下位システムが用いられているとみなされる。

以上が、ケースAの操作的分析結果である。以下のケースではこのような分析経過は省略し、自己の下位システム(人格分離)に関する解釈結果のみをしるす。(人格分離以外の興味ある心的力動も多々みられるが省略せざるおえない)。

〔事例H〕 24才女。ある悲しみの体験を中心に面接が展開。あるsessionで、まずシャボン玉や風船で遊んでいる自分が登場、それがピエロの姿に変わる(単一人格S'のS''化とみな

*統計の操作的方法、および統計の数量的結果は複雑になるので省略するが、たとえば、S', S''等の判定や実感の評定については一定の基準でクライアントが自己判定を行い、カウンセラー評定とくい違った場合にのみ協議するという手続きをとっている。また以下のケースでも、できるだけこれに近い方法をとっているが、クライアント本人評定が不可能な場合、本人の体験チェックを行った人を含んで、2人以上の第3者評定によった。

す。) 次いで、もう1人自分らしい別の人(新たなS')が現われ、ピエロの心の中に、もみくちゃになった罫の文字がレントゲン画のようにはっきり見えることを主張し、ピエロの持っているラップが悲しみの音色を出すことも指摘する。しかし、ピエロはあくまでも悲しみを否認しつづける。このやりとりがしばらく続く中でピエロは、「悲しみは、おまえの心の中にあるんだ」と言い張るS'にラップをわたすが、S'はためらい、ラップを押し返してしまふ。

以上の面接では他者化された「自分らしい女」と「ピエロ」のいずれかが語り手に近かったかは判然とせず、S'、S''を反転させて考えても良いようなものであるが、ピエロの方が防衛機制をあらわしていることは否定できない。ところが次回には、逆にピエロの方が悲しみを感じるに至る。

次回の筋書きを要約すると、ピエロが裸の自分(S')を針金でぐるぐる縛って、自分の心の中にしまい込み、悲しみを感じさせまいとしている。しかし裸の自分にCIの自己同一視と感情のきざしが強く「針金を解いて、ここから出して」と必死にピエロに抵抗する。ピエロは無垢なS'に悲しみの事実を告げるわけにはいかないと、S'を氷づけにしてしまう。そのピエロは何もかも承知しており、自ら悲しみを背負い、涙まで流すやさしい存在である。やがてピエロはCIの母親の姿に変わり、S'は幼児的なCIの姿になっていくのであった。

このケースでも感情への直面とそれに対する防衛の葛藤が2つの自己の分離をひきおこしていたと考えられる。同じくCI自身に受け入れられた解釈によればこのケースでは、防衛的な自我が一貫した「ピエロ」(S'')の姿をとり、それに対する第1人格(S')は、はじめは、真の感情的自己というよりも「自分によく似た別の人」というように他者化されて、二重に防衛されていた。しかし、感情がこみあげてきてCI自身が実際に泣き伏してしまったときに、瞬間S'もS''も消失し、すべてが統合されたという場面もあった。また洞察がよ

り進んだ段階では、「裸の自分(S')」をピエロが守っており、ただし感情の存在を知っているのはピエロの方であって、それを真の自己に急激に伝えないように守っている。

このケースでも後にCIが感情受容に至ったときピエロは消失するのであるが、人格分離とともに、それぞれが他者化されるということが特徴である。また真の自己(ないし裸の自己)対ピエロという一貫した下位システム間のダイナミクスに終始しており、ケースAのように主人公の本体に変化はない。それは抑圧による分離というよりは、防衛的内部力動をそのまま下位人格化(サブシステムの相互作用化)におきかえたようなものである。ただ基本的には、イメージを媒介にして感情的自己が分離され、その後統合人格が感情的実感に至るという点では共通したのももっている。

〔ケースL〕 20才女。大熊・円治らのGSRとイメージの研究(文教大学一般研究C報告書1980)で用いられた7回にわたるイメージ面接例である。第1回目にも、二重の自己が登場しているが省略し、第2回目面接を要約しよう。はじめに屋根の上でひとりで座っている自分(S')が見える。その自分の前を髪の長いきれいな女の人(S'')が通りすぎる。その後を追いかけて湖の方へ行くと湖のところに靴がそろえて置いてあった。そこで自分は家に帰って、その女の人が死んだのではないかと家の人に告げる。みんながおどろいて自分だけ残して湖にその女の人をさがしに出かける。次の朝、様子を見にいくと、高い木の上にその女の人が座って下の様子を見て笑っている。その女の人(S'')が「誰か死んだそうよ」と言うので「あなたじゃないの」と聞くと「ちがう」と言う。変な気持ちになった。その後、自分(S')は遠くの学校の寄宿舎に入ることになった。そこではその女の人(S'')が先生をしていた。彼女は孤児院へ寄付などもしているが、学校が終わると酒場で歌っているという噂もあった。その人は孤児院の子を引取って育てるが、やがてある男性とかけ

おちしてしまう。彼女をみていて、彼女の裏面も認めてあげたい、自分にも自分を大切に
するわがままなぐらいの生き方が分るんじゃないかと思う。

ここで髪の長いきれいな女の人は、他者化されているが、CI自ら後にそれを自己の第2人格(S'')として認めている。興味あることにここでは、第2人格(S'')自体が、表面善良でありながら、2重人格的に、裏面では奔放で自由な生き方をしている。そしてそれをみている第1人格(S')は、S''の裏面の方に1種のあこがれを抱いている。普通のケースにおいてはS''は、自由奔放な裏面だけの存在であってよいのであるが、防衛その他後述の理由によってS''をもう一度2重人格化しなければならなかったのであろう。

以上の第2回目とかなり対応するのが第6回目である。自分(S')は、汽車の中で知りあった夫婦と山小屋に行く。妻(S''')の方は病気で青白い。山小屋にいると毛皮をきたきれいな女の人(S'')がくる。その女性はよく気がつき男の気持ちがわかる。その女性と男の人は前からの知り合いのようである。病気の妻を置きざりにして、3人で山を降りる。毛皮を着た女(S'')は、ピストルで山小屋の方をうつ。殺したわけではないが、その後いきさつがあって毛皮の女(S'')と男が夫婦になり、自分(S')はそれを認めることになる。後日、S'の夢の中で病気の女(S''')が出てくるが、安らかにせいせいした感じである。

ここで病気の妻(S''': CIの病的な面を若干表わす)が、別の自己(S'')によって置きざりにされ、その犠牲においてS''が公認されている。自己の下位システムとしていえば、S''の象徴的な死からの再生としてS''が自らを完成したと解される。このこと自体が二重人格的メカニズムであるが、しかしさらに第2回目との共通点として、第2人格S''自体がよく気がつく社会的な面と影としての面をもった二重人格性をもっている。詳述する余裕はないが、S''をめぐるこれらの複雑な関係は、CIの内的矛盾の複雑さを表わすものと解される。こ

の複雑な関係がここでは一層前面に出て、自我が処理できないためそれだけ第1人格(S')は影がうすくなり、人格分離はS'-S''間よりもむしろS''内部(おおよびそれとS'''の間)に見られることになったのだと思われる。

これに対して、同じ主題による多重人格性がまさに通常のS'-S''間の相互作用として、第4回目の面接時に示されている。ここでは外側の自分と内側の自分がイメージ的に対比させられている。外側の自分(S')は仕事をきちんとし、友達とも仲よくなれるが、内側の自分(S'')は、すごく重いものをもった感じである。他人を優位にたたせるようなことをしている自分(S')を思うとイヤな感じがしてイライラする。

この一連のイメージでCIがはっきりと2人の自分を語っているのは、この第4回目だけである。それは人を気づかうまじめな自己と自由奔放な自己との分離だということができ前述した第2・6回目の複雑さを端的にS'-S''の矛盾として単純化したものだとみることができる。

なお第5回目で他者を気づかう現実的自己(S')に対して自らは電話もできない(現実能力をもたない)女の子(S'')が登場している。それは、第6回の病気の女とだけ共通するものであり、この全体のテーマの中ではおそらく第3人格として扱うべきものだと思うるのでこれ以上の言及はさけるが、その否定を媒介にして自由奔放な第2人格が日のめをみることはふまえておきたい。このステップが必要なため、第4回目以外は、単純なS'-S''の物語になりえなかったのだと思われる。〔その他のケース〕以上のほか、今回とりあげたケースは次のようなものである。

ケースB: 36才男。イメージの中でかなり本音とも思える攻撃、退行などのテーマを示すが、常にその自分と見ているもう一人の自分がある。主人公の動きが常識的なときや、イメージに浸っているようなときは、その主人公の方を自分(S')と感じるが、生々しくなってくると、見ている自分の方が強く出て

きて主人公の実感は薄くなり、時には他人のように見えてくる（S'化）。全体としては、「見ている自分」の方がより自己的（S'）である。

なおこれに類したケースは、今回とり上げなかった多くのイメージ面接で認められ、部分的にこのような過程がみられるケースはさらに多い。また、たとえば登山している自分と飛行機に乗っている自分という二重自己において折りにふれて後者が「見ている自分」に転化するという例（30代男）もある。

ケースD：20代男。小説ジキルとハイドに似た筋書きなので省略するが、社会適応的自分（S'）と別のところで悪事を働いているS''が同時存在し、時に出会って口論したり、S''の悪をS'が黙認したりする。

ケースE：20代女。外では適応した社会人としての仮面をかぶり、家に帰るとわがまま娘的になるという実生活を反映して、イメージの中でも家の中で女王のように振舞っている（S'）。家の中が狭く感じられ、外に行こうとするのだが玄関から出られない。外の町では誰かが笑顔で仕事をしているが、「あんなの嘘っぽちだ」と軽蔑したくなる。やがて彼女（S''）が悩んでいること、もしかすると自分自身かもしれないということに気づいてくる。面接が進むうちに、いつしかS''の方が主人公になって、わがままな振舞いもするようになり、最後にはS'とS''の区別はなくなる。

なお、本論ではとり上げなかったが、ケースD.Eに似た例も数多く経験されており、臨床的多重人格の通例のように、自我とイド、ペルソナと影その他の相補性を示していると思われるものが多い。

ケースF：20代女。Eとは逆に外では活発に楽しく過ごす、家に帰ると不幸な家族関係のためにうつうつと過ごしている女性。その家庭の悩みに対処するため、あえて自分を二重人格化して、普段外で生活している時は「別の彼女（S''）が家では不幸な思いをしている。どうせ夜のひと時なのだから我慢して耐えていればよい」とイメージし、ほんとう

の自分（S'）は家庭外の生活だけで統一を保った。

ケースC：20代女。幼児期の不幸に意識的には直面できなかったが、イメージの中で、比較的無感動な自分（S'）に対して、家の外に放り出され泣きさげんでいる子供（S''）が何回にもわたって登場する。両者の関係は、誰れの間からみても、今の彼女の幼児期をふり返っていることが歴然とするようなものであるが、CIは最後まで「子供」を他者としてしか感じないので、別の幸せな幼児期を空想し、その方を自分に近いと思っている。なお次のケースGと同様、第2人格S''が複合した諸相を示しているが省略する。

ケースG：30代男。自分をあらわしているような犬（S'）が一匹、攻撃的に吠えている。やがてゾウがあらわれ、犬はゾウに向かって一層吠えだす。ゾウは、しかし動ずることなく受容性すら示して鼻で犬をあしらっている。いつしかゾウが主人公になって、ボスのような雰囲気をもたせる（S''）。しかし犬は益々吠え、やがてまた犬の方が主体になってゾウを倒してしまう。これはCIによって、攻撃的の第1人格と受容的の第2人格との葛藤のテーマとして解釈されたが、後になってゾウの中の支配的攻撃性も洞察され、最後に倒された時のみじめさも再体験されている。ある意味では第2人格が（ケースLにおけるように）さらに複合的な意味をもっていたものと解される。

この他本論でとりあげなかった複合的ケースは多く、たとえば滝に打たれる修行僧（S'）に対して、滝が第2人格化され、その滝が魔王のような表情になったり、風雨を一体化したり、そうかと思うと修行僧が少女の姿に変わったり、逆に僧が彼女を風雨から守ってエロスの展開に至るといような複雑な例もある。

このほかA～Lの諸ケースに似た、あるいはそれ以外の多くのケースがあり、とくに通常のイメージ面接の中で、一時的に2人の自分に相当するものが現われているとみられるケースは多数にのぼるが、これらは考察の参考にとどめることとする。

表I ケースのまとめ

	第1人格S'	第2人格S''	自分としての実感	変換	統合・その他
A*	自我的感情防衛的	感情的・幼児的	主としてS'	不協和でS'のS''化	第3人格あり 親和→統合
B	主我的・観察的	客我的・感情的	主としてS' (逆の場合も)	不協和でS'客体化	S'一部他者化 S'化する統合
C	現在の自己	過去の自己	S'のみ	S'のS'''化	第3人格あり S''の洞察なし
D	善良・自我的	影・イダ的	主としてS'	S' ↔ S''	
E	わがままな真の自己	社会的仮面	主としてS' (逆の場合も)	S''のS'化	S''の他者化 S'化による統合
F	適応的の真の自己	不適応場面	主としてS'	S''他者化	
G	攻撃的	受容・複合的	S', S''ほぼ同じ	S'攻撃 ↔ 受容	S''の二重性
H*	幼児的・真の自己	仮面・自我	''	S', S''の特性変化	S''一部他者化 共に一部他者化
L*	観察的まじめ	自由奔放	S'のみ		S''他者化 S''の二重性 第3人格あり

*は、とくに詳しくとり上げたもの。

E, HのS', S''を入れかえれば, A, D, E, H, Lは臨床二重人格と共通

現象としてのまとめ

力動的考察に入る前に、以上のケースについて、イメージ現象としてのまとめをしておきたい。表1はその簡単な要約である。表示しえなかったポイントも含めて整理すると、次のようになろう。

- (1) イメージの中の人格分離は、語り手に最も同一化された登場人物S'が、語り手S''を十分に代表できないときに起こりやすい、それはCIの複雑さ(L, G)、自己客体化即ち主我と客我的分離(B)、防衛とくに感情防衛(A, H)その他の自己受容されていない面の表面化(C, D, E, F, L)等による。それがS''以下の下位人格にあらわれる。
- (2) 人格分離における主人公S'とS''との関係には次のような場合がある。すなわち①はじめから別のS''以下が出現、②途中から別のS''以下が出現、③途中から下位システムが分離する形でS''以下が出現、④途中からS'がS''化して別のS'が出現、⑤その他S'-S''交代を含んでS'が転々と変化し、それに伴ってS''も変化する場合などである。

- (3) 上記①、②の場合に、S'としての人物は不変な場合からかなり変容をとげる場合まで様々である。S'がS''化されて、別のS'が新たに生まれた場合にも、次第に以前のS'ないしより統合されたS'に変化していくことが多い。(S', S''を合せて相補的にS'をできるだけ網羅するように変換されると考えられる。) S', S''ともその姿は①S'自身ないしそれらしい人物、②S'の過去、未来などに相当する人物、③容姿不明の人物、④他者らしい人物、⑤動物、⑥植物、無機物その他、様々であり、それによって自己としての実感度が必ずしも規定されるわけではない。
- (4) 定義からしてS'の方が自己の実感度は高いはずであるが、実際には①ある程度S''の感情や行動が生々しくなった瞬間にS''の方がより自己に近くなる。②S', S''の反転、再反転が短時間で起っているため、主人公と筋書きの一貫性からして、反転から再反転までの間はS'の方がより自分としての実感をもっている場合などの例外がある。いづれにしても、identityの急激な変化に際

しては、事実上①の定義的原則が通用しなくなる。③その他、G、Hのように、どちらをS'としても支障ないくらい、両人格の自分としての実感が共に強い（または共に弱い）場合もある。

- (5) S'とS''すなわち第1人格と第2人格の関係は表1に示したように様々であるが、S'とS''の入れ替えを含むと、分離の形態は主として、①「見る自分」(主我)と画面の中で動く「見られる自分」(客我)、②タテマエ、仮面、自我、善良さ、理性等々の概念に対応する自己に対して、ホンネ、真の自己、イド、影、自由奔放、感情等々の概念に相当する自己、③その他の対立的分離形態に分けて考えることができる。ただし具体的なニュアンスはケースによってまちまちであり、必ずしも二極的対立とはならず、また対立というよりは「複雑さ」をあらわすとみた方がよいようなケースもある。
- (6) S''も主人公として内容的に一貫している場合から、S'との関係で変化する場合まで様々である。一般にS''はS'よりCIの自己としてのidentityが低いので、他者化されたり物化される率は高い。
- (7) 感情に関しては一般にS''の方が感情的動きをし易いが、語り手の感情と結びつき易いのはS'の感情の方である。語り手がS'の感情を(程度と質において)受容し難いときには、S'はS''化ないし他者化される。
- (8) おそらくはCIの内的体験の流れに応じて、S'、S''のそれぞれも、全体の筋書も独自に変換される。しかしいずれかに変換がおきると、他の方もそれに応じて変化する。このように、S'とS''は一面では2人の人間関係の発展の筋書を展開するが、しかし他面では双方が同じ自己としての統一テーマを展開していく。
- (9) 最後にS'、S''の統合は、本論の記述の範囲内では十分に明らかになっていないが、その後の展開を含めて、おおまかに推察すれば、S'が成長してS''を同化するという形が多い。S''も多かれ少なかれ変化するよう

である。また双方が止揚されて別の統合人格へという形をとることもあり、この双方の中間段階もある。内容的には両者の親和、協同、両者の特性が近づいてくること、一方が弱まっていくこと、いずれかを通して感情の明確化や現実認知が生じること、その他の治療的過程によって起こるようである。感情的には、第1人格(S')が感情的になり得ること、逆に深層的第2人格が自我化(S'化)されることなどが重要であり、その結果は、統一主人公による通常のイメージscriptのようになるわけである。

このほかもちろんイメージ面接中にてなく次回までの間に統合がなされて、全く変換されたイメージ内容があらわれる場合も多いが、その場合でも詳しくみていくと、統合過程とそれに至るイメージ変換の道筋をたどることができる場合が多い。

ダイナミックスに関する考察

以上のケース全体を通じてほぼ共通している心的力動としては、まずCIすなわち語り手の日常的、自我的側面が比較的そのまま第1人格として登場していること、そしてその自我にうけ入れられない側面が、第2人格化されている点である。もちろん第1、第2人格の役割が逆転している場合もあるが、いずれにしても全人格システムに受容されたい部分が構造化されて、下位システムを作り、その結果受容されている面もまた(多くは第1人格的な)下位システムになってしまうとみなされる。ケースA、B、Hなどにおける、感情防衛も非受容・不協和のひとつの場合とみてよいであろう。また現実に実現不可能な事柄も「現実に許容され得ない」という意味で非受容のひとつの場合とみてよいであろう。

一般に第1人格と第2人格が対立関係にあり、しかもいずれか一方(主として第2人格)が他者化されやすいことは、まさに自己の内部矛盾の表現であり、その典型が自我的社会的人格とイド的な影の人格の二重性となって表われやすいといえよう。したがって多

くのケースでS'-S"間の対立が親和に変わると、二重自己は統合に向う傾向にある。

しかし第1人格と第2人格がすべて対立関係にあるのではない。ケースAの第1回面接最後にみられるように、二重人格のままお互いが抱きあったり、なぐさめられる関係のテーマが継続することもある。ケースHにおける母性的防衛的ピエロと「裸の自分」の関係の中にも現実の母子関係に変換できるような協力関係のニュアンスがある。

ジキルとハイド式のケースDにおいては、第1人格(S')が親切にふるまって、ある他者を手なづけ、それにつけて第2人格(S")がその他者を、いためつけてしまう。ここで表面上はS'(第1人格)がS"(第2人格)の攻撃から他者をかばうが、実際にはそれは演技であって、S', S"は(政治的陰謀や犯罪におけるような)功妙な共犯の協力をしているのであった。

以上のように、通常観察される対立関係や抑圧、防衛関係だけでなく、一般に別々の下位人格になった方が都合よい場合や、統一するにはあまりに自己の内容が複雑すぎる場合にもイメージにおける人格分離はなされる。複雑さゆえの多重人格例はそれこそ複雑になるので省略せざるを得なかったが、まさに多くの主人公を自己の分身として登場させなければならない作家の作品のような例がイメージ面接においてもまた観察され、それがCIの多様な潜在的可能性を暗示しているとみられる場合のあることも付記しておきたい。

要約すれば、自己の全体構造と重要な部分構造との間の不協和、ないしは構造化のシエマの葛藤(比較的全体を構造化する2つ以上のし方の間の葛藤)が多重人格化をもたらす全体に対してバラバラな要素や微少部分が葛藤しているだけであれば、無視または同化調節によって人格の統一性は保たれる。しかし大きな部分や別の構造化原理が異質物として登場するときには、本来それを下位システムとして認知する方が自然でさえある。イメージ面接では単一人格の現実対応が、その場

は不必要であるから容易に2~3人の「自分」をつくりだすことができる。さらに自己を他者化したり、他者を自己化したりして人間の潜在的可能性を、様々な人格的まとまりのもとに感じとることさえできるわけである。

最後にイメージ面接における人格分離と現実の臨床的多重人格との関係についてであるが、その基本的メカニズムは異なるものではない。とくに、悪や影の面、あまりに強い感情やnegativeな感情面など、一般に自我に受容されない面が、現実の(悪人、幼児等の)人物の姿を借りて構造化され、サブシステムとなることである。

しかしこのような非受容、認知的不協和に基づく、2重人格のメカニズムは、そもそもイメージ面接それ自体の中で解消されるような面をもっている。通常のイメージ面接では、主人公そのもの(S')が、CIの日常的自己に対して、第2人格的な面をもちやすい。それゆえ、イド的第2次の過程の強調されたイメージ治療過程が進行するわけである。

したがってイメージ面接の中での2重人格は、語り手(S)-主人公(S')の2重性をもってしても解決困難な条件があった場合、それがさらに第1主人公(S')-第2主人公(S")の矛盾としてもち越されるのだと考えられる。それでも不十分な場合、ケースLやGにみられるように、S"自体がまた2重人格化したり、あるいは本論では省略した第3人格以下の登場を必要とする。一般にイメージが深まって深層が象徴化されるようなときは、主人公はイドないし影的な面、すなわち現実の日常的自己と相補的な面を表わしやすい。これに対して防衛や客観視が働くほど、「見る自分」の登場をはじめ、ここに掲げた諸例におけるような2人以上の主人公が登場して、その主人公たちが相補性を担うのだと考えられる。したがって下位人格が多くなって、第1人格の役割が少なくなったような臨床事例が、イメージ面接の場合に近いといえるかもしれない。

イメージの中では(現実比して)感情も強められるし、内的に不協和な部分も実感される。

一方2人以上の自己を登場させることも、また自己の他者化、他者の自己化も容易である。したがって語り手の受容範囲をこえて登場人物内でその都度多重人格的な構造(ないし script)が形成されやすい。以上が現実の臨床の多重人格とは異なる第1の重要なポイントである。

第2に、当然のことながら、イメージ面接では諸主人公は身体を共有しているわけではなく、したがって同時に共存している。また彼らの心は原則として語り手Sがすべて意識しており、あるいは演出し使い分けている。これらが臨床の多重人格と異なることはいうまでもない。^{*}

第3により広い意味の下位システム分離例、すなわち自己が2人以上に分れた方が都合がよかったり、認知的にあまりに複雑になりすぎるために2人以上の典型的な人物像を借りてこざるを得ないというメカニズムが、現実の臨床の多重人格に結びつくかは、必ずしも明らかではない。すくなくともそれに相当する顕著な病的事例には、我々はほとんど接していない。おそらく、ジキルとハイド型のような激しい葛藤にまでは至らないため、現実の病理にはつながらないのかもしれない。あるいはまだ我々が発見していない潜在的臨床の病理の存在しうることを示すものなのかもしれない。

しかし先にも述べたように、むしろこの種の複雑さゆえの分裂(内的矛盾)は、通常は見すごされている。それをイメージ的に多重人格化するということは、現実的には自己の内部矛盾や統合しきれない潜在的可能性を洞察し、あるいは未知の世界にまで目を見開くという積極面をもつと考えられる。そしてこのような積極面は、自我対深層の分裂を示す通常の(ジキルとハイド型)の多重人格にもおそらく認めることができるであろう。

イメージ面接における多重自己の登場は、一面ではたしかに、臨床的の多重人格に相当し、CIの軽度の内的病理の現われとして治療的アプローチの対象になるものである。しかしそれはまだ我々が臨床的に発見していない病理の潜在的可能性を暗示するものかもしれない。そしてなによりもより健康な意味で人間が自己の内部矛盾に気づき、あるいはより深く、広い潜在の人間性にも目を見開き、自己を発展させていく過程をも示しているのだといわなければならない。本論では、芸術・文学に表現されたイメージは扱えなかったが、それは作家が、単一人格による私小説をこえて、多数の主人公によって思想や情念をたたかわせ、人間性に迫っていく道と異なるものではないと思われる。

(1983年9月22日受付)

^{*}ただS-S'関係においてSとは異なった側面をもつS'にCIがなりきっているようなときには、CIは時にイメージの中の自分(S)の方が日常の自分(S)よりも(存在感の上でも)「自分」と感じる時がある。そんなときは語り手Sは、記憶喪失ならぬ実感喪失に若干近くなっている。さらに本論でとりあげたS-S'の分離においては、少くとも一時的にS'に自分を強く感じる事が多く、そのときS'は多かれ少なかれ実感喪失し、時には消えてしまうという意味で、臨床多重人格の自己意識とは程度の差だといってよいかもしれない。(事実イヴの床例にみられる統合のための第3人格ジューンのように、治療者を頼りつつすべてを意識しているような存在は、多重人格をイメージしている語り手Sと多分に共通点があり、あるいはケースAにおける第1人格やケースBにおける「見ている自分」とも共通点がある。)